阿波の国の概説　　1、　弥生の村から阿波の国へ

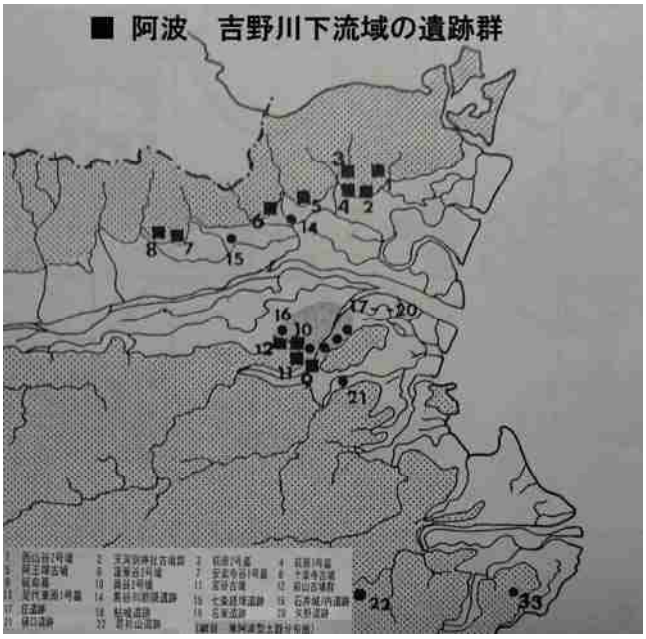
両側を険しい山が聳える中央構造線が東西に四国北岸を貫く。
その中を西から東へ大河　吉野川が流れ下る。　この吉野川流域は縄文時代から数多くの人達が住み着いた先進地で、この吉野川の下流河口域を中心に古代　初期大和王権を支えた阿波国が築かれる。

　弥生・古墳時代から古代にかけて、現在徳島平野が広がる吉野川河口域は東に開ける深く広い大きな入江になっていて、大陸・朝鮮半島から北部九州を経て畿内・大和へと続く「和鉄の道」の東四国の玄関口として大いに繁栄してゆく。
弥生時代の中期後半から後期初頭にかけて　吉野川下流域北岸の阿讃山脈の山縁や吉野川の南岸　四国山地の東端 眉山・気延山の麓 吉野川に流れ込む鮎食川の扇状地には　鉄器や鉄器関連遺物が出土する拠点集落（　北岸：光勝院寺内遺跡・カネガ谷遺跡

　南岸：矢野遺跡・名東遺跡・高川原遺跡など ｊ　が形成され、それらの地域が流通・交易拠点として　周辺地域を巻き込みながら次第に大きくなると共に、この地を治める有力豪族も生まれ、次第にひとつの国　阿波国としてまとまり、初期大和王権を支える有力国のひとつとなってゆく。
律令体制下になると畿内と四国を結ぶ「南海道」は紀伊の国賀太（加太）駅から淡路国福良駅を通過して、阿波国牟岐の海（紀淡海峡）を渡り、石濃駅・郡頭駅を経て讃岐国引田駅から四国北岸を西へ向かう。
一方、その支路は引田から南へ阿波国国府へとつながり、吉野川河口域は東西を結ぶ陸路・海路の拠点として発展してゆく。

扇状地の北岸の気延山山麓に初期大和王権との結びつきを示す前方後円墳・前方後方墳大きな古墳を築く。

図2-3-6　徳島県の地形区分　　出典：徳島県「徳島県環境白書」



阿波の国の概説　　2、徳島・阿波国に見る日本誕生

ー弥生時代後期 村から国へ動乱の時代から 古墳時代 古代国家への胎動へー

徳島県立埋蔵文化財センタ展示より 再整理 2010.2.6.

【弥生時代後期 動乱の時代】

「魏志倭人伝」に記された「倭国大乱」は弥生社会全体を巻き込んだ動乱。その結果 岡山（吉備）や近畿（近畿）の集団は勢力を伸ばした。時代のうねりは徳島にも及ぶ。阿波では３０遺跡４３口の銅鐸が知られる有数の銅鐸出土地域で、銅鐸の埋納ているが、銅鐸の埋納と相前後して、記号や絵画とは異なる思想を表現した弧帯文が流入し、朱や勾玉の製作や鉄器生産に専従する人人が出現。鮎喰川流域で製作された土器群は東部瀬戸内海から大阪湾岸に拡散し、朱や玉介した交流が拡大する。肥大化した集落を中心に地域はまとまり、村から国へ社会が移ってゆく。

（ 鉄器も同じだろう。弥生時代後期 武器・工具・農耕具 全体に急速に鉄器の需要が拡大。徳島では 鉄器のほとんどが期を通じて 鮎喰川流域 矢野集 落遺跡や庄・蔵本遺跡からの出土であるという。 ）

弧帯文土器

土器などに施される文様の一つ。

直線と曲線の組合せにより表されている。徳島県内では矢野遺跡、黒谷川郡頭遺跡、井出上遺跡から出土した土器にみられる

【弥生時代末期から古墳時代前期 倭の首長連合】

各地に国ができた頃、首長個人を葬る弥生墳丘墓が出現する。墳丘墓は地域食が強く、徳島では突出部を持つ円形の積石墓が造られ、儀礼用の小型時が備えられた。その後、中部瀬戸内から近畿にかけた地域の首長たちは、各地の葬送儀礼や首長権を統合し、政治的連合のしるしとして、長大な竪穴式石室を持つ前方後円墳を創りだした。首長連合が広がるに連れ、前方後円墳は列島各地で築造され、倭における国家の原形が固まってゆく。

【古墳時代中期・後期 古代国家への胎動へ】

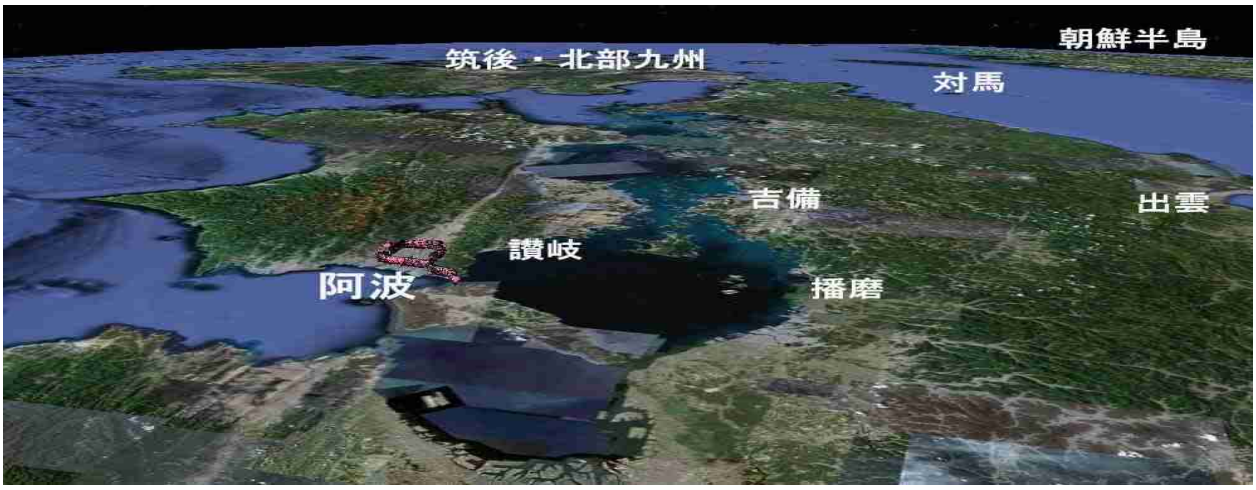
古墳時代中期は前方後円墳の大型化と乗馬・須恵器・横穴式石室などの新しい技術によって特徴づけられる。後期には、横穴式石室が家族墓として中小の首長層にも広く採用され、吉野川流域を中心に地域職の強い石室が作られた。有力農民層による新たな農耕地の開発が進む一方で、塩・鉄・土器などの生産に組織化された工人の活動が始まる。中央集権国家体制が推進されるにしたがって、古墳の築造は徐々に終焉を迎える。

阿波の国の概説　　3.　*阿波と初期大和王権とのかかわり*

「大和王権の成立に大きな役割を演じた阿波の力の源泉は何だったのだろうか???」
「また、鉄に結びつけるのか」といわれるのを承知で　手元にったあるいくつかの資料を繰ってみました。
数年前に二上山博物館へ行った時に買った「ふたかみ邪馬台国シンポジュウム６　『邪馬台国時代の阿波・讃岐・播磨と大和』」（香芝市教育委員会・香芝市二上山博物館　2006）の資料やインターネット検索で矢野遺跡など弥生時代の後半から古墳時代の吉野川流域の遺跡について事前学習。

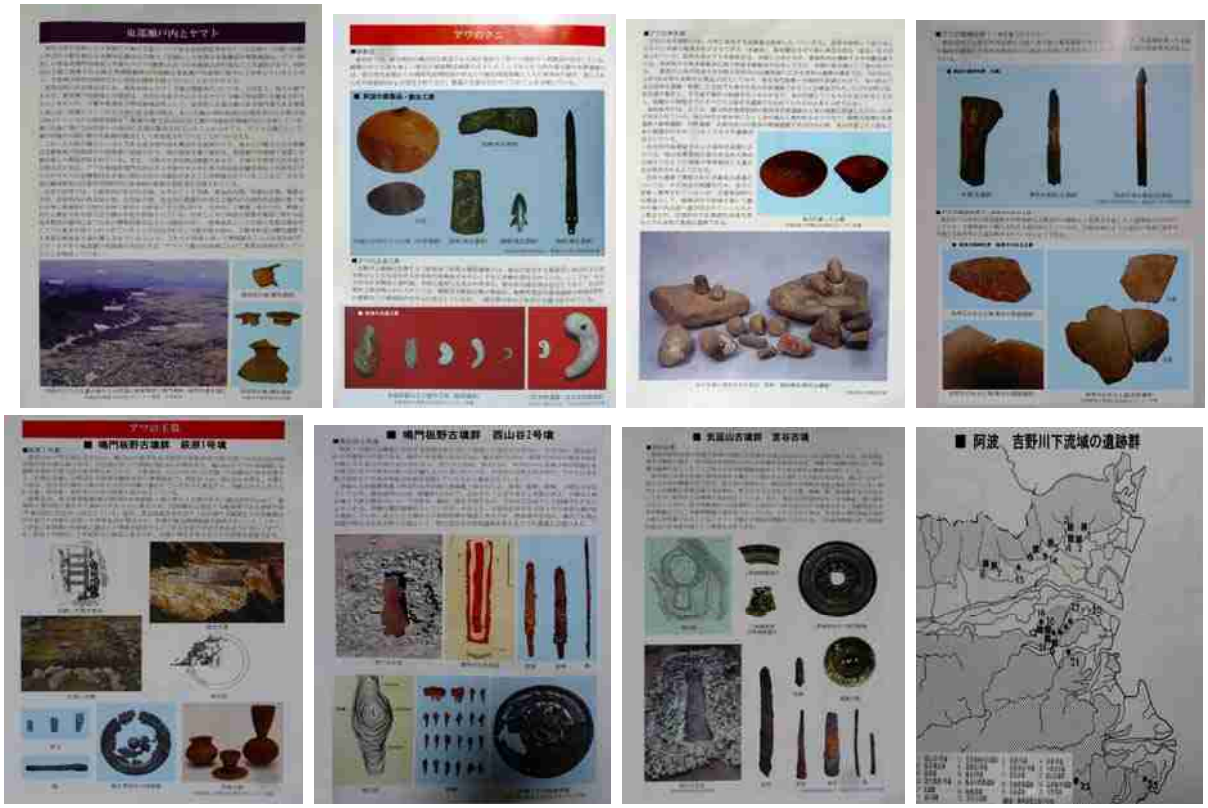
> 邪馬台国が存続していた３世紀　大和の王墓である大和ホケノ山古墳の「石囲い木棺」や石棺の石囲いの特異な多重構造の埋葬施設は阿波や播磨の王墓の古墳と共通性があり、同時代の王墓に中国鏡を副葬するのも東部瀬戸内に集中分布。大和と吉播磨・阿波との密接な関係がうかがえ、大和王権を象徴する前方後円墳の主要構造のうち、墳丘上に樹立される埴輪は吉備の特殊器台や特殊壷に起源を持つ。また、前方後円墳の中核部である長大な竪穴式石室は阿波で発達したもの　墳丘を覆う葺き石は東瀬戸内の積石塚と関係するといわれる。　また、徳島の結晶片岩と呼ばれる薄青色の石が初期の墳墓の石郭に使われた例がかなりあることなど、この地域の土器ばかりでなく、王墓築造の技術にも大きくかかわり、初期大和王権に東瀬戸内の諸国・阿波が大きな役割を演じてきたことがわかる。
>
> ふたかみ邪馬台国シンポジュウム６　『邪馬台国時代の阿波・讃岐・播磨と大和』」
> 東部瀬戸内とヤマトより

この諸国の力の源泉は何なのか・・・・
初期大和王権を支えた西日本連合の結びつきの中核に朝鮮半島の鉄の支配権・鉄の流通路の確保があったといわれ、卑弥呼・初期大和王権誕生前の時代は倭の大乱と呼ばれる戦乱の時代であったことと考え合わせると、「鉄の道」の大和への玄関口に位置するこれら東瀬戸内諸国の役割が必須だったと考えられる。
そんな倭の力の源は何なのだろうか・・・　通商路の拠点を押さえたことばかりではなかろう。
そんな阿波の力の源になったのは阿波の国の生産力。　その特産品が「朱」「勾玉」の生産そして上記した吉野川流域で出る薄青色で光る墳墓石郭材料の「結晶片岩」であると知りました。そして「鉄器生産」も????
初期大和王権の有力諸国のひとつとして　ぼんやり　阿波をイメージしていましたが、やっぱり阿波は大きな力をもっていたのだろうと。　ついでながら　吉備は鉄と塩　讃岐は塩・サヌカイトが国力の基かもしれません。



Google 写真　阿波を取り巻く周辺諸国

阿波の国のアウトライン理解の助けとして「ふたかみ邪馬台国シンポジュウム６　『邪馬台国時代の阿波・讃岐・播磨と大和』」の口絵にあった資料ほかをそのまま転記させていただきました。
また、この中に　ぜひ見たかった矢野遺跡の鍛冶工房内から見つかった「砂鉄」の写真もありました。

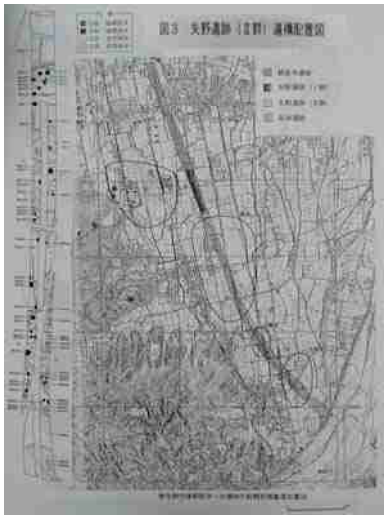


「ふたかみ邪馬台国シンポジュウム６

『邪馬台国時代の阿波・讃岐・播磨と大和』」の口絵より

吉野川下流域北岸　阿讃山脈の山裾　　四国山地の最東北端　鮎喰川の扇状地　国府地区

阿波国　弥生の終末期・古墳時代初期　阿波の王城の地



阿波国の中心に展開した四国山地の最東北端　鮎喰川の扇状地　国府地区

写真上端が　右から左（西から東）へ流れ下る鮎喰川　写真中央南北に貫く国道 192 号　国府地区の中心

【参考】　　「ふたかみ邪馬台国シンポジュウム６
『邪馬台国時代の阿波・讃岐・播磨と大和』」の口絵　転載

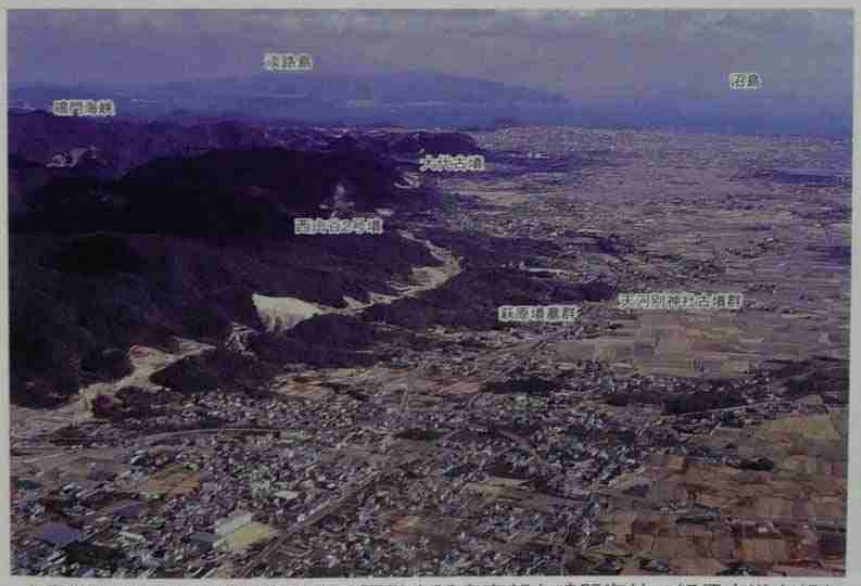
東部瀬戸内とヤマト

邪馬台国が存続した３世紀の大和の王墓の一つである奈良県桜井市ホケノ山古墳の「石囲い木槨」と呼ばれる柩を納める木槨や石槨を石で囲う「石囲い」の特異な多重構造の埋葬施設は、アワ（阿波）の徳島県鳴門市萩原１号墓やハリマ(播磨)のたつの市綾部山39号墳などと共通性があり、同時代の王墓に副葬される画文帯神獣鏡等の中国鏡も東部瀬戸内地域に集中して分布していることから、当地域は邪馬台国時代から密接な関係を持っていたことがうかがえる。

邪馬台国の所在地をはじめ、邪馬台国とヤマト王権の関係等については、古代史上、最大の謎であるが、東部瀬戸内地域との関係は、次代の大和を中心とするヤマト王権の形成期にも継承されたものと考えられ、王権中枢地及び周辺地域以外として、定型化した最古級の前方後円墳である箸墓古墳と近い時期につくられた大型の前方後円墳は、キビ(吉備)の岡山県岡山市浦間茶臼山古墳(全長138m)やハリマの兵庫県姫路市丁瓢塚古墳(全長104m)など瀬戸内海沿岸地域付近に分布している。瀬戸内海に開けた沿岸沿いの高台に古墳が築造されていることからみても、ヤマト王権にとって、瀬戸内海が大陸に繋がる航路の拠点として重要視されていたことがうかがえる。

これらの大和王権のシンボルである前方後円墳を構成する要素のうち、墳丘上に樹立される埴輪は吉備地域の特殊器台や特殊壺に起源があり、墳丘斜面を覆う葺石は、東部瀬戸内地域で発達した積石塚との関係が説かれている。また、今後の大きな検討課題であるが、古墳の中枢部である長大な竪穴式石室は、アワの徳島県鳴門市西山谷２号墳やサヌキの香川県高松市鶴尾神社４号墳等のアワやサヌキの石室構築技法を基に創出された可能性があることが指摘されていることなど、主な古墳の構成要素には邪馬台国時代の各地域の墓制や祭祀等が反映されている。

近年の研究では、大阪府内の松岳山古墳、玉手山７・９号墳、紫金山古墳、将軍山古墳、闘鶏山古墳、兵庫県内の西求塚古墳、五色塚古墳、奈良県の燈籠山古墳など畿内の古墳時代前期の数十基の古墳に徳島県の吉野川流域で産出する結晶片石と呼ばれる「光る石」で構築、あるいは、構築されたと推定される竪穴式石槨の存在が指摘されている。石材とともに阿波の墳墓の築造に関わる技術者集団が畿内に来て石室の構築技術を伝えた可能性が高く、埋葬施設という古墳の重要な構成材にアワの要素が採り入れられていることが注目される。大阪平野を始め、王権中枢部の纒向遺跡でも多量の阿波系土器が搬入されていることも、これらの現象と決して無関係なこととは思われず、アワ・サヌキの東部瀬戸内地域の首長たちは、ヤマト王権の形成期にかけて重要な役割を任っていたことを物語っている。



３世紀のアワの王墓が集中する阿讃山脈東南部と鳴門海峡・紀伊水道を望む
※徳島県埋蔵文化財総合センター撮影・写真提供

讃岐系の壷(纒向遺跡)

阿波系の壷(纒向遺跡)
※桜井市教育委員会所蔵

アワのクニ

■鉄製品

徳島県では、弥生時代の拠点的な集落である南庄遺跡など数十の遺跡から鉄製品が出土している。銅鐸の中でも最も新しい型式の袈裟襷文銅鐸が出土したことで知られる県内最大級の矢野遺跡では、弥生時代後期から古墳時代前期初頭の炉などの鍛冶関連遺構とともに鉄素材や鉄片、壺に入れられた砂鉄約200gが発見されており、鉄器の生産が行われていたことを示唆している。

■アワの玉造工房

吉野川上流域に位置する三好郡東三好町の稲持遺跡では、地元で産出する蛇紋岩と呼ばれる石材を原石とした勾玉を作る弥生時代後期後半を中心とする工房跡が発見されている。ここでは、勾玉や勾玉の未製品と剥片他、生産に使用した台石や叩き石、筋のある砥石等が出土しており、勾玉の製作工程が明らかにされている。類似する蛇紋岩製の製品は、板野町黒谷川郡頭遺跡や阿南市若杉山遺跡などの徳島県内を中心に出土しているが、一部は香川県など県外にも運び出されている。

蛇紋岩製勾玉の製作工程（稲持遺跡）
※徳島県立埋蔵文化財総合センター所蔵

（左:矢野遺跡・右:石田布施遺跡）
※左は、徳島市・右は、さぬき市教育委員会所蔵

■アワの朱生産

古代の赤色顔料には、天然に産出する赤鉄鉱を粉砕した「ベンガラ」、辰砂(しんしゃ)を粉砕して取り出したものと水銀と硫黄を化合させて作る「水銀朱」、鉛を酸化させて淡い赤色を得る「鉛丹」などが知られている。辰砂を産出する水銀鉱床は、各地に分布するが、徳島県内を横断する中央構造線上には、奈良県の大和水銀鉱床に続く阿波水銀鉱床が分布しており、水銀の産出地として知られている。　那賀川上流の阿南市水井町の若杉山の山腹斜面に広がる若杉山遺跡の調査では、石臼40点、石杵350点等の多数の石製品が出土しており、弥生時代後期～古墳時代初頭にかけて、朱の原石である辰砂を採掘・精製した全国でも希少な朱の生産遺跡であることが確認された。石臼や石杵には、叩き潰す動作と、すり潰す動作の痕跡をもつものがあり、朱の付着しているものも見られることから、採掘から精製までのすべての工程が当遺跡で行われていたものと考えられている。

徳島県内では、古くは、縄文時代後期初頭の徳島市矢野遺跡から朱の精製に関連した石臼・石杵が発見されている。弥生時代中期末頃になって朱が盛んに使われるようになり、鮎喰川(あくいがわ)流域の名東遺跡や鮎喰遺跡、矢野遺跡、吉野川河口の黒谷川郡頭遺跡でも石臼や石杵、朱の付着した土器など朱の精製が行われていたことを示す遺物が出土している。

弥生時代後期後半から古墳時代前期にかけては、岡山県楯築(たてつき)墳丘墓や奈良県天神山古墳などのように墳墓の埋葬施設に大量の朱が使用されるようになる。

若杉山遺跡で精製された水銀朱の流通については、その同定が困難なため、充分に把握・解明されていないが、古墳築造時の必需品として、鮎喰川の下流域を通して畿内や瀬戸内方面へ運び出されていったものと推定され、古墳時代の広範囲な流通を知る上でも非常に重要な遺跡である。

朱の付着した土器
※徳島県立埋蔵文化財総合センター所蔵

朱の生産に使用された石臼・石杵・辰砂原石(若杉山遺跡)
※徳島県立博物館所蔵

■アワの精神世界１－木を使ったマツリ－

徳島県内でも弥生時代前期から続く最大級の集落遺跡である庄[illegible]は、祖霊像を象った木偶や銅剣を模倣した剣形木製品などの集落の祭祀に使用されたと推[illegible]る木製の祭祀用具が出土している。

■ 阿波の精神世界　木隅

木偶(庄遺跡)

剣形木製品(庄遺跡)

用途不明木製品(庄遺跡)

※徳島市教育委員会・徳島市立考古資料館所蔵

■アワの精神世界２－弧帯文のある土器－

徳島県では黒谷川郡頭遺跡や矢野遺跡など数箇所の遺跡から弧帯文を施した土器等約15点が出土している。吉備地域から搬入された土器が出土しているが、吉備地域のように墳丘の祭祀に弧帯文を施した器台等の土器は使用されていないようである。

■ 阿波の精神世界　弧帯文のある土器

弧帯文のある土器(黒谷川郡頭遺跡)

弧帯文のある土器(黒谷川郡頭遺跡)

弧帯文のある土器(矢野遺跡)

※徳島県立埋蔵文化財総合センター所蔵

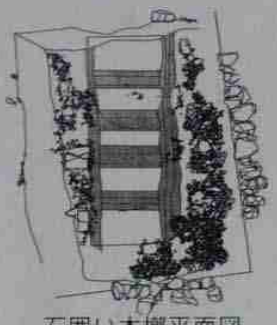
アワの王墓

■ 鳴門板野古墳群　萩原1号墳

■萩原１号墓

直径18mの円丘部に長さ8.5m、幅3.6mの低平な長方形状の突出部(前方部)を持つ全長26.5mの前方後円形の積石塚である。円丘部に沿って周囲に幅1.8mの溝があり、幅3.6mのくびれ部両側には壷棺を納めた竪穴式石室が作られている。主体部は、円丘の中央に石で囲った木槨内に棺を安置する「石囲い木槨」と呼ばれる特殊な構造を持つ埋葬施設で、残存長４m、幅1.25mを測る。木槨の上面は、長方形の壇状に築かれた白色の円礫で覆われていたものと推定され、供献されたと考えられる壷・台付壷・高杯等の小型の精製土器が出土している。

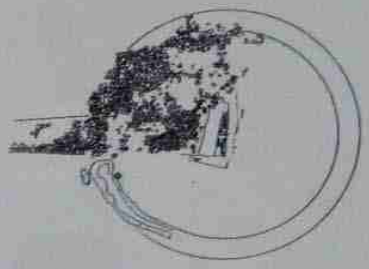
副葬品は、画文帯神獣鏡(画文帯同向式神獣鏡)１面と管玉３点等がある。鏡は直径16.1cmで、副葬時に意図的に割られて納められたものと推定され、同型鏡が公孫氏の支配地域である朝鮮半島(平壌大同江付近)から出土している。近年、奈良県桜井市のホケノ山古墳や兵庫県たつの市綾部山39号墓でも同様の石囲いの埋葬施設が発見され、同種の画文帯神獣鏡が副葬されていたことから、３世紀の東部瀬戸内地域と畿内との関係を研究する上であらためて注目されるようになってきている。萩原１号墳は、３世紀前半の築造と考えられ、古墳の発生を考える上でも貴重な墳墓である。



石囲い木槨平面図

墳丘全景

石囲い木槨



墳丘図

管玉

鉇

画文帯同向式神獣鏡

供献土器

※徳島県立埋蔵文化財総合センター所蔵

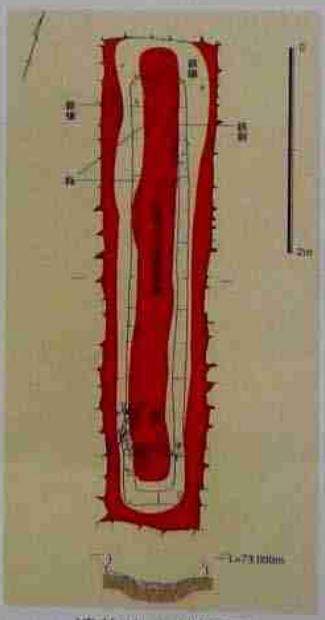
■ 鳴門板野古墳群　西山谷2号墳

■西山谷２号墳

萩原１号墓の近隣地に所在する尾根を削り出して整形した墳丘の長径20m、短径18m、高さ約２mの不整形の円墳である。墳丘の中央部に長さ4.72m、幅北端で1.05m、南端で0.83mの南北方向を主軸とする長大な竪穴式石室がある。竪穴式石室は、南北6.5m、東西4.8mの墓壙全体が結晶片岩と呼ばれるアワ特有の青い石で覆うように造られている。石室内には粘土床があり、その上に朱を敷き詰めたU字形の刳抜式木棺を安置していたものと推定されている。

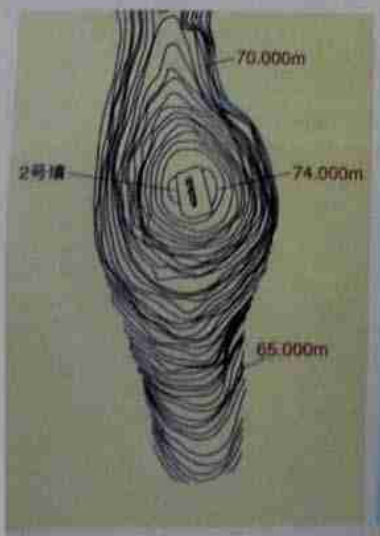
斜縁上方作銘獣帯鏡と呼ばれる中国製の青銅鏡１面をはじめ、鉄剣、鉄槍、鉄鏃、土器などが出土している。鏡は面径12.5cm、重量約157.6ｇで、右回りに「上方乍竟大工青龍白虎子」の銘文と神仙像と５体の獣形のレリーフがある。鏡は一部を欠損するが、当時は完全品として副葬されたものとみられる。同種の鏡は数例出土しているが、そのうち、広島県広島市中子田１号古墳出土鏡が最も類似している。出土した土器から３世紀中葉の築造と考えられ、徳島県内を始め、畿内でも最古段階の竪穴式石室を持つ古墳として、竪穴式石室の出現過程を考える上でも重要な古墳である。

竪穴式石室



遺物出土状況図

鉄剣　鉄槍　鉇



墳丘図

鉄鏃

斜縁上方作銘獣帯鏡

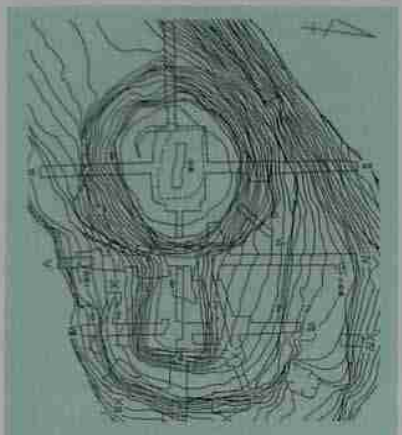
徳島県立埋蔵文化財総合センター所蔵

■ 気延山古墳群　宮谷古墳

■宮谷古墳

徳島平野西南部の気延山東端の尾根上に位置する墳丘長約37.5mの前方後円墳である。前方部は低平で撥形に開き、後円部は直径約22～25mの不整形な形状をなす。西眼下の鮎喰川岸には、袈裟襷文銅鐸が出土したことで知られる矢野遺跡を始めとする弥生時代の集落が分布している。

後円部のほぼ中央部に東西方向を主軸として割石を小口積にした内法全長5.95m、幅1.2～1.3mの竪穴式石室が構築されており、粘土床の形状から、棺は朱塗りの刳抜式木棺と推定されている。棺内からは優製の重圏文鏡１点を始め、管玉やガラス玉などの玉類、鉄鏃、鍬、板状鉄斧などが出土しており、棺外からは鉄剣１点が出土している。また、墳丘くびれ部付近からは土師器二重口縁壺が出土したほか、前方部裾部からは盗掘時に石室内から持ち出された可能性がある三角縁張是作大神四獣鏡などの三角縁神獣鏡３面が見つかっている。このうちの１面は、奈良県天理市黒塚古墳出土鏡と同型鏡であることなどヤマト王権との密接な関係がうかがえる。三角縁神獣鏡を持つ徳島県内最古の前方後円墳として重要な古墳である。



墳丘図

三角縁神獣鏡片

三角縁唐草
文帯神獣鏡片

三角縁張是作六神四獣鏡

竪穴式石室
※徳島市教育委員会提供

鉄剣

鉄鏃

重圏文鏡

鉄鉾

鉄斧

鍬

※徳島市教育委員会・徳島市立考古資料館所蔵